



題名:ワクチンのニーズと人との関わり

発表者氏名:今井咲希、菅原颯香

背景・目的

新型コロナワクチンは危険だということをよく耳にするので調べてみたところ死亡例や後遺症、アナフィラキシーショックというワードが出てきたので今後、私達は新型コロナワクチンに限らず、他のワクチンともどう付き合っていけばいいのか、知るべきだと思った。

目的としては、私達が研究したことで周りの人たちがワクチンについてより良い判断をしてもらうこと。

すでに分かっていること

- ・新型コロナワクチンを接種していない人がいる。
- ・接種後ワクチンの後遺症に苦しめられている人がいる。
- ・インフルエンザワクチンの接種は毎年推奨されている。
- ・子宮頸がんワクチンも再び推奨されている。子宮頸がんワクチンの副作用により、一時的に接種の推奨が止まった。
- ・ワクチンの後遺症によって、裁判を起こしている人がいる。

仮説

子宮頸がんワクチンは、副作用や後遺症、裁判についてのニュースから接種していない人の割合が大きいのではないかと予想(5%)

コロナ禍によって、インフルエンザが以前より流行していないことから、インフルエンザワクチンの接種率は減少したのではないかと。

研究の方法

ワクチンについてのアンケートを取る

論文から引用する

インターネットで調べる

結果

～アンケート結果～

インフルエンザワクチンの接種率は45%、子宮頸がんワクチンの接種率は34%であった。

～論文・インターネットからの引用～

・子宮頸がんワクチン

国は1回目接種から1ヶ月後に2回目、6ヶ月後に3回目を接種することを推奨している。

☆接種後の強い体の痛みなどから国と製薬会社を20代女性が訴えた裁判について

原告側:高い有効性や安全性などを備えていないのにワクチン接種の促進政策をとったのは違法だ。

被告側:ワクチンの安全性は多くの臨床試験や各国の評価機関、専門家による検討などを通じて医学的・科学的に確立している。接種と検診により子宮頸がんのリスクを低減させることは非常に重要だ。

裁判はまだ続いている。

結論

・子宮頸がんワクチンは約3割の人が接種しており、副反応については個人差がある。

また、接種の判断を保護者に任せている人が多い。

・インフルエンザワクチンは約5割の人が接種しており、同様に副反応については個人差がある。

考察

子宮頸がんワクチンに関する後遺症などのニュースがあるが、接種率が予想より高かったのは、国から接種を推奨されているためだとわかる。

コロナ禍前と比べて、インフルエンザワクチンの接種率に差がほぼなかったことから、コロナ禍はインフルエンザワクチンの接種率に関係していないことが分かる。

今後の展望

研究したことを広め、多くの人にワクチンについて考えてもらう。

参考文献

<https://www3.nhk.or.jp/fukuoka-news/20240122/5010023170.html>

<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/06/dl/s0618-9a.pdf>

アンケート回答者